

困窮、會所銀等借用之人々は、利足さへ相滞、脇借銀・買掛等は猶更返濟難仕候。加様に成行候ては上納之期無之、脇借銀等は彌不埒に罷成、風俗も悪敷罷成候付而、上納相滞候分は役銀・出銀或は會所銀等も一所に合、御貸銀被仰付、除知を以連々に上納有之可然候。脇借銀・買懸等も、都而唯今迄之通相對にては埒明申間敷候付而、一統爲書出申儀に候條、人々銀高次第返濟之筋も追付相極、是又除知を以沙汰仕首尾に可罷成候。其趣は追而可申渡候。然ば借銀方向後之所は譯立可申候得共、差當飯米并日用指つかへ候に付、其分に難成置、當分之儀は何とぞ御救無之候はでは必至と及難澁申様子達御聽候。然共御要脚差つかへ候に付、御家中へ可被相省御有餘無之、江戸・京・大坂等において才覺被仰付候得共調兼申候。追而は銀高茂調申筈に候得共、唯今御家中之急難を御救被成候御點に合不申候故、御納戸金之内を以、右調候迄之内當分御取替候而、知行百石に二百目充之圖に先御借、御歩等御切米取之分は、知行五十石に准百目當りに御借之可被成候。尤當時之飯米并入用所持之者は不及御沙汰候。入用等不足之分は、人持・頭中初

末々迄右之趣に候條、組・自分共に被得其意、夫々可被申間候。此返上銀之儀茂、上納銀同事に追而可申渡事。
(享保十年)
 乙巳七月
 今度家中之面々勝手困窮之由に付、納戸銀之内を以續銀貸渡候。是以後勝手取續相勤候條專一之事に候。就夫勤略之筋第一に可被申渡候。先規より松雲院殿段々被定置通、無相違可相守事肝要に候。其故此度改而不申間候條、萬端右之趣に相心得、人持并組頭支配等自今以後彌嚴重に相心得、急度相慎候ば、其組中茂可致信用事に候間、各被得其意、何茂可被申渡候。以上。
 享保十年八月廿六日 御朱印
 一〇 參勤御供人行狀等之儀
 被仰出
 家中之人々致困窮候に付、取續之儀去年申付候。今般江戸に相詰申者共、旅行從者隨分致減少、從者衣類等茂相改申間敷候。老人之外、頭分たりといふとも無謂駕籠乘用仕

間敷候。尤乘懸馬、美麗之飾等堅く可爲無用事。

一、江戸在留中於長屋、同役用事等爲申談寄合申外、出合遠候而尤に候。假令邂逅出合候共、聊花麗之儀有之間敷事。
 一、門外行步遠慮可仕候。無據子細有之候はゞ、其品頭・支配に相違可受差圖候。尤用事相仕廻候はゞ早速可罷歸候。若及遅參候はゞ頭・支配より年寄中に可申達事。
 右之趣急度致得心、勝手取續奉公專一に可相心得候。猶委細之儀年寄共より可申渡候條、一統致承知、嚴重に相守可申候。

以上
 享保十一年三月七日 御印

覺

一、歷々頭分之儀は、諸士・諸役人之手本等に茂罷成事に候得ば、萬端相慎、内外作法宜敷、不及迄も風俗相嗜可申事に候所、心得違取亂したる族茂有之様に被聞召候。何茂御家久敷面々に候處、御爲惡敷儀は不奉存筈に候得共、頭分始風俗惡敷時は、おのづから其風俗に習親、畢竟御爲に

よろしからず被思召候事。
 一、江戸表之儀は、人々小屋に雖有之、外邊同様之事に候得ば、人々穩便相暮可申所、小歌・淨瑠璃等、或其町中にも相聞候程に亂がはしき躰、尾籠之仕形粗其聞有之。侍之正義をも取失ひ申様に見聞之者茂可有之候。左様に候而は、第一御爲に不可然候。人々急度相慎、相互に無禮不作法無之様に可被相心得事。
 附、下々博奕其外尾籠之仕形共有之儀、其主人に不覺悟に准可申候事。

一、近年御旗本衆參會之儀は、堅く御停止に候。左候得ば御出入之御坊主衆等或聞番などは、承合之爲御用、於御長屋參會茂可仕處、已前聞番等相勤候面々其外茂、御屋形にて度々參會之好を以無謂相親、且御出入之御役者共茂、樂舞稽古に事よせ猥に馴親、不慎之行狀茂有之様相聞候。向後は聞番に候共、於御殿參會之外は、一向附合可爲無用事。
 一、音物之品、表立候而贈答無之面々茂、内々之附届有之躰に候。向後餞別之送物并土産之品、親子・兄弟之外は堅可爲無用事。